

## 野村望東尼と姫島

写真・文

松尾 邦久



鏡山から見た姫島（左上）



### 姫島について

姫島は加也山がある糸島半島（糸島市）の岐志〔きし〕漁港から北西4 kmにある島です。 周囲4.5 kmの島で、定期船（所要時間20分）が通っています。 島の名前は豊玉姫命が祀られている「姫島神社」に由来します。また姫島の北側には神豊玉姫命が生まれたと伝わる『産の穴』といわれる岩屋があります。そのせいか、島の女性はみな安産との言い伝えがあります。島には188人(2014年)が住んでいます。 集落は姫島漁港周辺にあり、漁協（JF）・学校、売店（日用品・食料品を販売する）があり島の社交場となっています。 港にはたくさんの網小屋が並んでいます。

近世には黒田藩の流刑地でした。



出航後15分、島が近づいてくる



島は花が多い



姫島漁港



姫島漁港に並ぶ納屋



姫島神社から漁港を見る

西岸に納骨堂があり、山には古い墓がありますが、  
寺はありません。 姫島神社も島民に大切にされています。



集落の入り口には「道祖神」



鳥居のそばには海からの捧げものが・・・



姫島神社（津波避難所となっています。）

島にはモダンな木造校舎の小中学校（併設）があり、児童・生徒が9名在籍しています。



姫島小中学校の木造校舎

産業は漁業（刺網）が中心で、島の集落の中や海岸部は畑となっています。 この島でも  
イノシシの頭数は増えその被害が多くなっています。



イノシシよけの柵に囲まれた畑は人家の近くに多い

## 野村望東尼のむらもとに（ぼうとうに）

野村望東尼は1806年（文化三）、福岡藩士・浦野重右衛門勝幸の三女として生まれます。幼名は本（元）〔もと〕で、のちに望東〔もと〕とあてるようになります。

24歳のとき二度目の結婚で福岡藩士の野村新三郎貞貫〔さだつら〕の妻となり、四人の子供を授かりますがみんな亡くしてしまうなど不幸がつづきました。

ちょうどこのころ望東尼自身も結核と思われる重い病気にかかり床に伏す生活がつづきました。彼女の中で無常感が募っていきました。41歳の時夫の貞貫を亡くしたのをきっかけとして、野村家の菩提寺の明光寺の元亮巨道〔げんりょうこどう〕禅師から曹洞宗の開祖道元禅師の教えを授かり引導を受け剃髪し、仏門に入り「招月望東禅尼」となり、42歳から平尾山荘（福岡市中央区）に住み、尼となって暮らし始めました。

避けることのできない苦しみを避けようと思わないこと・・・  
・道元禅師は「生きていることを自覚するのは、心なり。認識するのも心なり。疑うのも心なり。納得するのも心なり。住みなすのも、吾が心なりけり」と教えます。望東尼は心のままに生きることをこのとき決意しました。



野村望東尼像（平尾山荘）

## 野村望東尼と文学

望東尼は17歳のころより、福岡藩士で歌人・書家の二川相近〔ふたがわ すけちか〕のもとで学問、書、歌などの基礎を学びました。和歌は同門生の大隅言道〔ことみち〕に学びます。夫の貞貫も同門でした。子たちと夫を亡くした望東尼の心の慰めは古典文学でした。『徒然草』の中の、「独り灯りのもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよのう慰む・・・」そのものでした。都を題材とした紀行文や日記文学のいろいろな作品が望東尼を都へとまねきました。彼女の紀行文や日記文学の始まりではないでしょうか。とにかく都へのあこがれは望東尼が56歳のとき実現しました。このころの京都は寺田屋事件などにわかに緊迫した情勢となっていました。また、この京で望東尼は福岡藩の京都藩邸聞役に同道し、時事取材の手ほどきをうけました。この時期に物事を鳥瞰し筆をすすめる望東尼が生まれていきました。



葵祭（京都市観光協会）



「上京日記」（平沼文庫蔵）



平尾山荘 福岡市中央区平尾5丁目2番28号 [現在の山荘は明治42年に復元されたもの]

### 勤王の志士たちを支えた幕末の母 野村望東尼のむらもとに (ほうとうに)

福岡にもどると、平野国臣（もと福岡藩士、西郷隆盛らと交流が深く、薩摩尊皇派が起こした寺田屋事件で失敗し、福岡で投獄される。）や薩摩などの勤皇の志士たちとの交流がはじまりました。平野が目指した「開国前に統一しておかなければ、外国勢力の思うつぼにはまり、最悪の内戦をさせられる。薩摩が公武一和で出府し役職を得ようとするなどは愚策」という説に、「己を捨てた無心の誠」に望東尼は強く賛同したのです。獄中の国臣に応援歌をおくりました。

おのずから鳴けば籠にもかわれぬる 大蔵谷の鶯のこえ

忘れていても我かそいろの国の為 悪しかれとしはつゆ思はなくに

のちに国臣の禁固が解かれ、再び上京するとき、望東尼の庵をたずね、夜通し歌を詠み合い、時世を語り合いました。このとき、国臣は望東尼に獄中の差し入れのお礼にと料紙の束（これに望東尼は姫島で獄中記を執筆します。）を贈りました。燃ゆる思いを語り明かした国臣は翌朝京へ旅立っていきました。。



### 小祠〔しょうし〕の石碑

平野国臣、中村恒次郎の短歌を刻んだといわれる石がおさめられている。野村望東尼は、他の志士たちに先んじて命を落とした二人（平野国臣、中村恒次郎）の歌を石に刻み、庭に祀ろうとしましたが姫島に遠島なってしまう、家人が庭にうめました。明治42年の庵の再建と共に有志により掘り出され祠に祀ったと伝えられています。

このころの平尾山荘は志士たちの隠れやとなっていました。ここで、高杉晋作と知り合います。望東尼はこのときの晋作を「時がくれば香りはなつ梅」と言っています。追われながらも、長州へもどり尊王攘夷の志士として立ち上がる決意の晋作に望東尼は自ら縫った着物を渡し、見送りました。

まごころを つく〔筑紫〕のきぬは 国の為

たちかえるべき 衣手にせよ と歌を添えました・・・

晋作は望東尼へ「あの世にてお礼します」と感謝の手紙を送ったといわれています。

### 突然の幽閉と姫島への流罪

1865年（慶応元）、望東尼は反体制藩士処分の折、一蓮托生となり、自宅幽閉となります。

獄中記『ゆめかぞえ』の執筆もこのころ開始されます。その年の10月に姫島への流罪が決まり、11月に厳冬の姫島囚屋（獄舎）での生活が始まりました。

断罪も覚悟していた望東尼にとっては思いがけぬ生き止まりでした。

紅葉より先にといい、甲斐もなく のこる朽ち葉ぞ面なかりける



姫島囚屋は四畳たらずの板の間にはゴザが敷かれただけの狭い部屋には戸に封を付けられ、夜は灯りもともしてはならず、寒い冬は60歳となった病身の望東尼にはたいへん辛かったことでしょう。波打ち際が近く、さざ波の響きが途切れなくきこえていました。



望東尼を護送する一行が姫島へ渡った岐氣〔きし〕の浦（姫島渡船港）



望東尼が過ごした囚屋〔ひとや〕の跡に1981年に建てられた御堂

暗き夜の囚屋に得たる燈し火は 誠仏の光なりけり  
手弱女が心の香さへ折り添えて 囚屋に匂ふ冬の梅が香



南対岸には二丈の浦や唐津湾、鏡山を見ることができる

姫島には江戸時代には遠見番所があり、望東尼の実弟の勤務地であったので、彼女は見物に向かったことがありました。しかし、そのときは、嵐に遭遇し、島に渡ることを断念しました。今、その姫島に流刑でやって来るとは皮肉な話です。病が癒えない望東尼の囚屋暮らしは厳冬に向かい激しさを増していきました。囚屋暮らしの望東尼の楽しみは書き物でした。

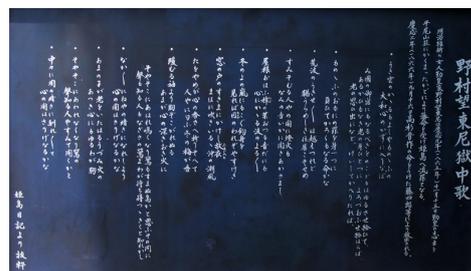
獄中記『夢かぞえ』や『姫島日記』を著し、姫島での暮らしのようすを実家へ書き送る・・・そのような暮らしが楽しくなっていました。囚屋暮らしの辛いところ、善いところ、いずれも書き送ることで望東尼の心は晴れました。嵐の吹かぬ静かな夜は熟睡できるようになりました。姫島の南対岸には唐津湾や鏡山、浜崎（対馬藩の飛び地）が見え、時には博多へ向かう船を見ることもありました。



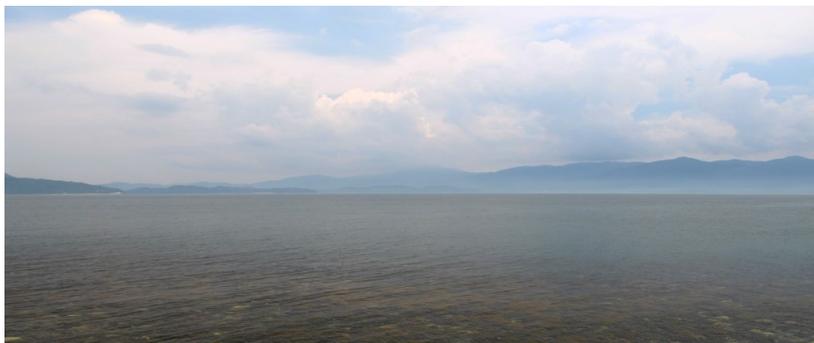
野村望東尼像（御堂）



さし入れられた灯籠  
（御堂）



『姫島日記』の歌碑（御堂）



姫島の南東岸からは糸島半島が見える

うき雲の かかるもよしや もののふの  
大和心の かずにいりなば

『姫島日記』望東尼・獄中歌より



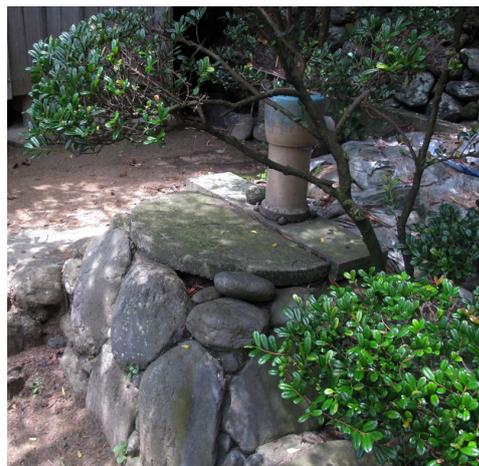
野村望東尼坐像（望東尼御堂に安置）



野村望東尼御堂

入獄から十ヶ月後、望東尼は島から晋作が差し向けた筑前の浪士藤四郎と対馬藩士多田莊蔵らによって救われ下関へ向かいます。多田が乗った対馬船が浜崎港（唐津市）に回航され、藤四郎らも到着し、姫島を前に作戦を練られました。多田や藤四郎は単に晋作の指示だけでなく、望東尼に恩があり、今回の望東尼の救出は彼らの恩返しでもありました。藤四郎はこの後も望東尼に付かず離れずで最後を看取ることになります。

1866年（慶応二）9月、船は下関に到着し、望東尼は回船問屋白石正一郎宅に匿われることとなります。脱獄をしたことで望東尼は福岡藩のこと（孫などの身の上）の心配や、再発した病気に気の和らぐことのない毎日を過ごしました。



御堂横の井戸



御堂横への入り口



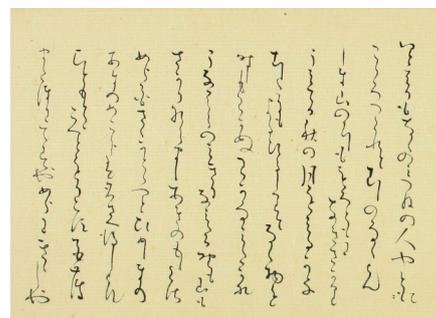
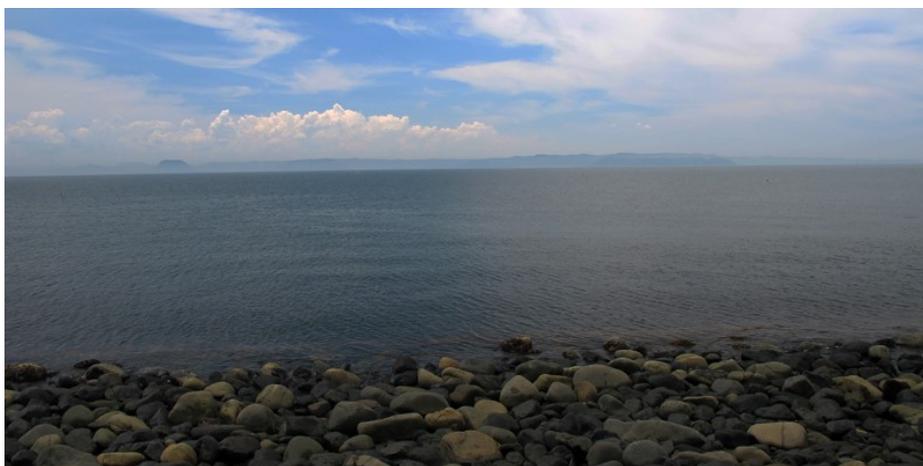
玉島川の河口にある浜崎港（唐津市）



姫島から晴れた日には二丈の海岸や唐津湾、鏡山を見ることができる

つくづくと向かふもやさし鏡山 あらぬ姿にやつれ果て来て  
浮岳や吉井の浦を夢にただ かくて見んとは思ひがけきや  
雲は皆ひれ振る山に振りさけて 唐津に積もる波の白雪

『 夢かぞへ 』望東尼・獄中歌より



「姫島日記」(写本 早稲田大学図書館)

壱岐・対馬とつながる海の風景 (姫島囚屋の前の海岸より)

望東尼はこの後、馬関（下関）の豪商の入江和作宅に移り匿われます。ここで病床の高杉晋作と再会します。その後、高杉晋作は、桜山招魂社近くの陋屋〔ろうおく〕（小屋）で恋人の「おのう」と療養生活をしました。もともとこの小屋は白石が望東尼のために用意したもので、高杉はこの小屋を「東行庵」と呼んでいました。

桜山招魂社側で療養していた高杉晋作が亡くなったのは、新地にあった大年寄林算九郎宅の離れ屋でした。

野村望東尼は「おのう」とともに、高杉の最後を看取りました。

晋作が、「面白き ことなき世を 面白く」と詠むと、

望東尼はそれにつづけて「位みなすものは心なりけり」と詠み、晋作が「おもしろいのう」と言ったとされています。（NHKの大河ドラマ『花神』でもそのシーンが放送されました。）

望東尼は高杉を看取ると山口の法泉寺の熊丸市衛門宅へ移り養生し、1867年（慶応3）薩長連合の討幕軍東上のことを聞くと、三田尻の歌友荒瀬ゆり子宅に身を寄せ、七日間防府天満宮に参詣し、断食し、一日に和歌一首を手向け、討幕軍の戦勝を祈願しました。



高杉晋作（国会図書館）



NHK大河ドラマ『花神』より

- (1日目) 武夫（ものふ）の 仇に勝坂越えつつも 祈るねぎごと うけさせ給え
- (2日目) 濃染（こぞめ）なす ます穂のすすき穂に出て 招くになびけ 千草八千種
- (3日目) 御世を思う やたけの心の一筋も 弓取る数に 入らぬかひなき
- (4日目) あずさ弓 引く数ならぬ身ながらも 思ひいる矢は 唯に一筋
- (5日目) 道もなく 乱れあひたる難波江の よしあしわくる 時やこの時
- (6日目) 唯七日 我が日まいりの果てなくに 神意月とも なりにけるかな
- (7日目) 九重に 八重居る雲やはれむとて 冬たつ空も 春めきぬらむ

この七日間の断食の後、間もなく病に倒れ、同年11月6日に下関から駆けつけた藤四郎らに看取られ野村望東尼62才の生涯を閉じました。

思い置く事もなければ今はただ すぐしき道に急がせたまえ

冬ごもりこらえこらえて一時に 花咲きみてる春は来るらし

【参考】 『野村望東尼・獄中日記・夢かぞへ』 小河扶希子編 葦書房

『野村望東尼』 小河扶希子著 西日本新聞社（西日本人物志）

『志摩町史』 志摩町

『野村望東尼と姫島』 志摩町歴史資料館

『高杉晋作』 古川薫著 文春文庫



姫島 2014年8月7日船上より